

# 鳥取県関金温泉における温泉場の活用と健康づくりの考察

## Consideration about Utilization for Hot Spring Resort and Health Care at Sekigane Spa in Tottori Prefecture

木藤 隆親\*  
Takachika KITOU

キーワード：国民保養温泉地 (national health spa) ・健康づくり (health care) ・

関金温泉 (Sekigane spa) ・湯中運動 (exercise in the hot spring bathtub)

### 1 はじめに

関金温泉は、鳥取県のほぼ中央、中国地方最高峰大山の東山麓に位置し、今から1300年ほど前、養老年間(717～724年)に鶴が入浴しているところを行基が発見し、弘法大師が再興したとの伝承が残る山陰の古湯である。700年代後半に伯耆国の国庁が近郊におかれたことから湯治場として、また、山陰と山陽をつなぐ備中街道の要所にあることから宿場町として栄えたと考えられる。適温で湧出する単純弱放射能泉の温泉は、湯の美しさから白金の湯と称され、保養や療養に適し、1970(昭和45)年に国民保養温泉地の指定(厚生省、現環境省)、2011(平成23)年に日本の名湯百選(特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム)の認定を受けている。

関金温泉を利用している主な施設は、温泉旅館4軒、日帰り入浴施設1軒、共同湯1軒、介護福祉施設4軒である。公共施設では、総合運動公園、親水公園等が整備されている。

1980年代には、地元農業団体、商工会、行政機関等が連日宴会を開き大変賑わったが、1990年代に入ると地元の利用客が減少し、観光客の誘客を図ったものの減少が続いているという<sup>1)</sup>。鳥取県がまとめた観光客入込動態調査をみても、入湯客数が減少していることが確認できる<sup>2)</sup>。

他方、関金温泉のある倉吉市では少子高齢化が進行し、医療保険制度の改定や公的介護

保険制度の導入により、市の財政負担及び市民の個人負担が増加している状況<sup>3)</sup>であり、倉吉市いきいき健康・食育推進計画においても健康寿命の延伸のため、一人ひとりが運動習慣の定着に努めることが指摘されている。<sup>4)</sup>

本稿では、長期滞在できる保養温泉地づくりを目指す関金温泉プラチナ(白金)プロジェクトの取り組みを通して、温泉場を活用した健康づくりについて考察する。

### 2 関金温泉プラチナ(白金)プロジェクト

関金温泉プラチナ(白金)プロジェクトは、前述の社会背景の中、「観光分野」「健康分野」「介護分野」が連携し、保養温泉地として長期滞在者の増加を図るとともに、地域住民に多く利用され、親しまれる温泉地を目指すプロジェクトとして、2012(平成24)年にスタートした(図1)。

実施主体は、関金温泉旅館組合を中心としながら、行政各部署(観光交流課、医療保険課、長寿社会課、保健センター)、介護施設が連携してプロジェクトにあたっている。

考察にあたり、プロジェクトの一環として、介護予防と生活習慣病予防の推進のために、運動習慣の定着と関金温泉の誘客を目的として、温泉に浸かりながら浴槽内で運動をおこなう湯中運動事業に取り組んだ。

\*倉吉市役所 (Kurayoshi City Office)

# 関金温泉旅館組合 『関金温泉プラチナ(白金)プロジェクト』

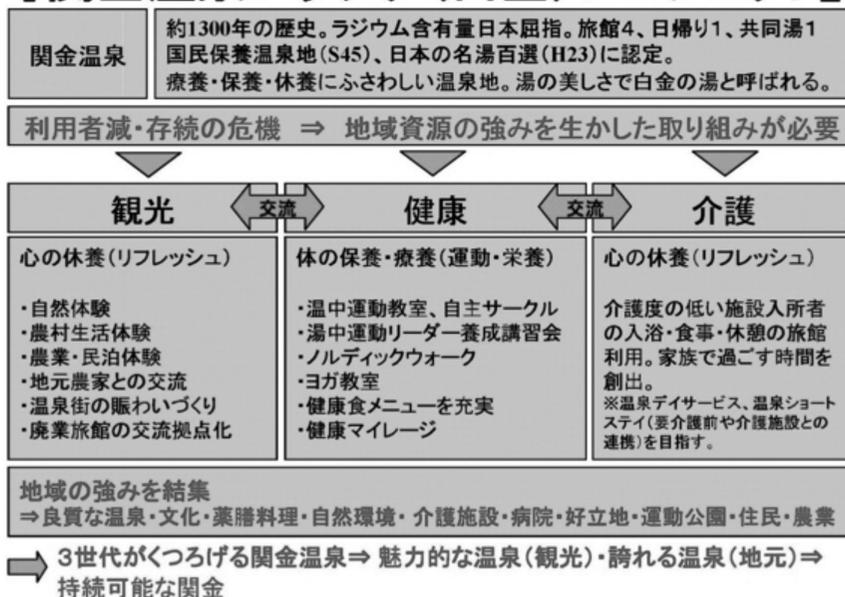


図1 関金温泉プラチナ(白金)プロジェクト

(注) 事業内容をもとに筆者作成。

## 3 湯中運動事業

### (1) 湯中運動の内容

湯中運動は、温泉の湯船に浸かりながら手足を動かし、水圧、水温、抵抗、浮力等を活用したアクアセラピープログラムである(写真1)。温泉の中で行う運動と、湯上りに和室等の畳の上で行う体操で構成されている。2012(平成24)年にモニター実施し、利用者アンケート調査(n=60人)の結果、93.3%の人が「また参加したい」との回答結果であったため、2013(平成25)年から本格実施することとなった。指導者は、福岡県からアクアセラピーの専門家を講師として招いた。

湯中運動事業は、「ヒザ腰シャキッと湯中運動教室」、「湯中運動リーダー養成講習会」、「湯中運動サークル」に分けられる。以下、各内容について説明する。

#### ① ヒザ腰シャキッと湯中運動教室

ヒザや腰に痛みや不安のある人を対象に、週1回のペースで合計8回～11回を1ク

ルとして、年間2クール(前期・後期)を実施した。会場は、日帰り入浴施設「湯命館」で、営業時間前の大浴場(09:00-09:40)と大広間(10:00-11:00)を貸し切り利用した。また、保健センターの保健師による健康講話を教室の中で随時実施し、生活習慣病や医療費等について学び、主体的な参加意識や健康意識を高



写真1 湯中運動の様子

(注) 筆者撮影。2013年5月。

表1 湯中運動の位置づけ

湯中運動の内容	事業の位置づけ	実施主体
ヒザ腰シャキッと湯中運動教室	国民健康保険事業 (生きがい健康づくり事業) ⇒保健事業	医療保険課 保健センター
湯中運動リーダー養成講習会	介護保険事業(介護予防一般高齢者施策事業) ⇒介護予防事業	長寿社会課
湯中運動サークル「ひとはな会」	自主サークル ⇒自主事業	会員 (事務局: 関金温泉旅館組合)

(注) 事業内容をもとに筆者作成。

める取り組みをおこなった。参加者は前期・後期を合わせ44名の参加であった。

### ②湯中運動リーダー養成講習会

湯中運動教室の指導的立場となる者を養成する講習会で、実技と講義を行い、成績優秀者に倉吉市長認定のリーダー認定証を交付した。週1回のペースで合計12回程度を1クールとして、年間2クール(前期・後期)を実施した。リーダー認定後もフォローアップ研修を行い、スキル向上を図った。ヒザ腰シャキッと湯中運動教室の卒業生がスキルアップのために参加するケースも見られた。会場は、日帰り入浴施設「湯命館」のほか、温泉旅館(国民宿舎グリーンスコールせきがね、美章苑、湯楽里)の大浴場を利用した。また、フォローアップ研修では、内容に応じて関金温泉内にある介護施設の運動浴槽も利用した。参加者は前期・後期を合わせ24名あり、16名の湯中運動リーダーが誕生した。

### ③湯中運動サークル「ひとはな会」

ヒザ腰シャキッと湯中運動教室の卒業生が継続して湯中運動ができる環境を整えるため、自主サークルの立ち上げ支援を行った。毎週水・木曜日に開催し、サークルの会員は参加しやすい曜日に週1回程度のペースで参加している。湯中運動リーダーが指導と運営を交代で行っている。会員数は30名程度あり、運営費用は会員の月会費によってまかなわれている。

### (2) 湯中運動の位置づけ

湯中運動は、温泉場を活用した健康増進を目的としているため、行政の福祉保健部局と連携して実施している。ヒザ腰シャキッと湯中運動教室は、医療保険課及び保健センターが担当し、国民健康保険事業の生きがい健康づくり事業として実施した。湯中運動リーダー養成講習会は、長寿社会課が担当<sup>5)</sup>し、介護保険事業の介護予防一般高齢者施策事業として実施した。湯中運動サークルは自主事業で、会員によって実施されている(表1)。

### (3) 湯中運動スキーム

湯中運動事業では、教室の参加者を募るため、イベント等に合わせ無料体験を実施し、教室の周知を行っている。湯中運動の無料体験者がヒザ・腰シャキッと湯中運動教室に参加し、教室終了後、さらにスキルアップを求める人は湯中運動リーダー養成講習会へ進み、継続参加を求める人は湯中運動サークルに加入していくというスキームで展開している(図2)。

また、湯中運動リーダー認定者は、湯中運動リーダー会「ゆりめりあ」を組織し、湯中運動サークルの指導及び運営にあたっている。

### (4) 湯中運動の効果

湯中運動の効果を検証するため、ヒザ・腰シャキッと湯中運動教室の教室前後において、収縮期血圧、拡張期血圧、長座体前屈、

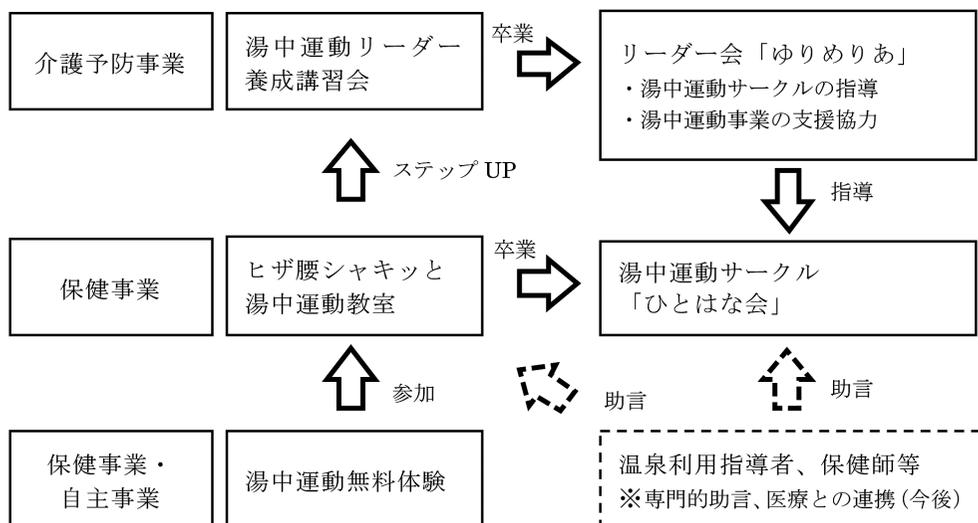


図2 湯中運動スキーム  
(注) 事業内容をもとに筆者作成。

表2 ヒザ腰シャキッと湯中運動教室(前期)

評価項目	N	教室開始前 平均値	教室終了後 平均値	前後差
収縮期血圧 (mmHg)	17	139	125	▲14
拡張期血圧 (mmHg)	17	74	67	▲7
長座体前屈 (cm)	17	33	40	7
開眼片足立ち (秒)	17	67	85	18
痛みのスケール	17	軽減10名 維持1名 増加6名		
※参加者20名				
※教室前後データ測定者 17名(女16名、男1名、平均年齢64.5歳)				
※教室実施期間 2013(平成25)年5月14日～7月2日(全8回)				

(注)筆者作成(2014)。

開眼片足立ちについて測定を行った。また、保健師による痛みのスケールの聞き取り調査を行った。

前期の教室においては、教室前後のデータ測定ができた17名の平均値の比較を行ったところ、収縮期血圧、拡張期血圧、長座体前屈、開眼片足立ちについて改善が認められた。痛みのスケールでは、軽減10名(59%)、維持1名(6%)、増加6名(35%)であった。増加の6名も10月の聞き取りによれば農繁期での作業量増等によるものと推察される。

後期の教室においては、教室前後のデータ測定のできた21名の平均値の比較を行ったところ、収縮期血圧、拡張期血圧、長座体前屈、開眼片足立ちについて改善が認められた。痛みのスケールでは、軽減13名(62%)、維持7名(33%)、増加1名(5%)であった(表2、3)。

参加者の声を抜粋すると、「ヒザの痛みが減った。」(70代・女性)、「身体が軽くなった。」(70代・女性)、「ヒザに水がたまらなくなり、病院に行く回数が減った。」(50代・女性)、「階

表3 ヒザ腰シャキッと湯中運動教室(後期)

評価項目	N	教室開始前 平均値	教室終了後 平均値	前後差
収縮期血圧 (mmHg)	21	140	132	▲ 8
拡張期血圧 (mmHg)	21	79	77	▲ 2
長座体前屈 (cm)	21	36	39	3
開眼片足立ち (秒)	21	65	84	19
痛みのスケール	21	軽減 13 名 維持 7 名 増加 1 名		
※参加者 24 名				
※教室前後データ測定者 21 名 (女 20 名、男 1 名、平均年齢 65.0 歳)				
※教室実施期間 2013 (平成 25) 年 10 月 1 日～12 月 10 日 (全 11 回)				

(注)筆者作成(2014)

段の昇り降りが楽にできるようになった。」(70代・女性)、「正座ができるようになった。」(60代・女性)、「肩こりが少し楽になった。」(60代・女性)等、日常生活において効果を実感している様子が伺える。

#### (5) 湯中運動事業のまとめと今後の課題

湯中運動事業で、血圧、柔軟性、バランス感覚、痛みのスケールの評価項目において改善がみられることを確認でき、温泉場を使った関金温泉での保養事業が地域保健事業に成り得る可能性が認められた。また、湯中運動サークルにおいては、サークルが立ち上がった2013(平成25)年10月から2014(平成26)年4月までの間に、延べ500人を超える参加があり、そのほとんどの人がこれまで関金温泉を利用していなかった人であることから、湯中運動事業により関金温泉の新規利用客が増加したものと考えられる。会員どうしの交流も生まれており、親睦を深めるイベントなどが実施され、交流拠点の一つとなっている。

湯中運動事業の今後の課題としては、運動内容の質や参加者の健康を保つため、健康運動指導士及び温泉利用指導者並びに保健師の常駐が必要だと考えられる。また、行政の福祉保健部局との連携を深化し、保健事業としての定着化、さらに、保健と地域医療機関・医師会との連携を図っていく必要がある。

事業の評価についても、運動機能等の評価項目だけでなく、教室参加前後の参加者の医療費の比較をおこない、温泉を活用した主体的な健康づくり事業の展開と継続性を検証していく必要がある。

## 4 結び

少子高齢化はほとんどの市町村で進行し、医療費や介護給付費の増加は避けられない問題となっている。今後、温泉場を活用した健康づくりは必要性が増してくると考えられる。健康づくりには、「運動」「栄養」「休養」の3要素が必要だといわれており、今回試みた湯中運動だけではなく、栄養や休養の取り組みも必要となる。

2012(平成24)年7月31日発出の国民保養温泉地の選定について(環境省自然環境局長)で選定標準が改定されたが、その根拠となる中央環境審議会の答申(2007〔平成19〕年2月6日)では、健康づくりの場としての体制整備として、療養施設、福祉施設等との連携の強化や、食と健康を組み合わせた温泉地の特色づくりが指摘<sup>6)</sup>されており、温泉旅館だけではなく、介護施設や運動施設との連携が求められている。

また、温泉施設を活用して健康増進を図る厚生労働省による温泉利用型健康増進施設の活用も必要になってくると考えられる。その

際、現状の施設に対する認定ではなく、前述の趣旨のとおり、複数施設の連携による認定へと展開していくべきと考える。

#### 注

- 1) 旅館の筆者聞き取り調査による(2011)。
- 2) 鳥取県(2013)：「観光客入込動態調査結果」、16頁。
- 3) 倉吉市医療保険課、長寿社会課提供資料(2012)。
- 4) 倉吉市(2013)：「倉吉市いきいき健康・食育推進計画」、3頁。健康増進法、食育基本法に基づく市町村行動計画。
- 5) 2013(平成25)年は観光交流課が地域資源観光活用事業として実施し、2014(平成26年)から長寿社会課に事業が移管された。
- 6) 中央環境審議会(2007)：「温泉資源の保護対策及び温泉の成分に係る情報提供のあり方等について」、8頁。

## シンポジウム

### 鳥取県の温泉地の活性化—観光振興の展望—

- コーディネーター : 山村順次(千葉大学名誉教授)  
 パネリスト : 増田克己(皆生温泉観光株式会社総支配人)  
 : 木藤隆親(倉吉市役所観光交流課)  
 : 御船 秀(三朝温泉木屋旅館社長)

**山村:** ただいまから、日本温泉地域学会第23回研究発表大会のシンポジウムを始めます。シンポジウムのタイトルは、「鳥取県の温泉地の活性化—観光振興の展望—」です。私は、司会を務めます学会常務理事の山村です。よろしくお願いいたします。今日は鳥取県の主な温泉地である皆生、関金、三朝の各温泉地から3名のパネリストの方々に参加していただきましたので、御紹介致します。まず、皆生温泉の増田さんから自己紹介をお願いします。

**増田:** 皆生温泉観光株式会社の増田です。私は5年半前にこの会社にお世話になりましたが、それまでは外資系の航空会社で30数年間働いていました。バンコクと香港に駐在した経験から多少の営業のマーケティングに関係していましたが、皆生温泉観光の坂内社長からお誘いを受け、お世話になりました。私は温泉の勉強を多少始めたというのが現状で、学術的なことをお話しできるかどうかと思いますが、今回皆生温泉を代表して、多少得ている知識、資料、経験とかをお話しできれば幸いです。よろしくお願いいたします。

それでは続きまして、倉吉市役所観光交流課の木藤さん、お願いします。

**木藤:** こんにちは。倉吉市役所に勤務しています木藤と申します。私は倉吉市役所で観光の仕事をしていますが、観光の分野にかかわらず少し幅を広げて、地域づくりを含めて温泉地をどうしたら元気にできるのかという取り組みを、ここ3年ほどやっております。今日は、その内容を皆様に御紹介できたらと思

っています。よろしくお願いいたします。

**山村:** では三朝温泉の御船さん、よろしくお願いいたします。

**御船:** 三朝温泉木屋旅館、八代目の社長をしています御船です。自己紹介ということで、少しPRをさせていただきます。本家は江戸の頃に庄屋をしており、旅人も泊めていました。旅館の創業は、明治元年と聞いております。私で八代目ですけれども、温泉を守るために今の位置でずっと宿屋をしています。玄関周りは明治の建物であり、明治、大正、昭和、平成の建物が複合しており、館内の施設配置は、2、3回は4～5泊程度していただかないと良く理解できないという、迷路が売りの宿です。よろしくお願いいたします。

**山村:** これからの議論については、まず鳥取県内の立地条件も性格も違う皆生温泉、関金温泉、三朝温泉の現状とあり方について、直接関わっておられるパネリストの皆様方から御意見を頂くとともに、どのような課題があるのか、その解決策など、現状を踏まえた話をうかがえればと思います。次いで、今お考えの具体的な観光振興策を具体的にどのように展開していくのか、将来展望を踏まえてのお話を頂ければ幸いです。

さて、鳥取県の温泉地は日本の47都道府県の中でどの位置にあるのでしょうか。環境省が毎年宿泊統計を発表していますが、平成24年度の宿泊客数を見ると、トップが北海道で1,100万人です。かつては静岡県が1位でしたが、現在は1,067万人で2位です。鳥取県は118万人で全国31位です。鳥取県観光

政策課の平成24年度温泉地入湯客数資料では、皆生温泉が40万人で1位、三朝温泉が37万人で2位、関金温泉が1.3万人であり、近年、いずれも減少傾向を示しています。このような状況のもとで、各温泉地がその特色を生かしつつ、どのような方向性を目指すのかが、このシンポジウムの課題です。

まず皆生温泉から伺いたいのですが、増田さん、よろしくお願ひします。

### 皆生温泉の歴史と集客状況

**増田**：皆様のお手元に会社案内をお渡ししました。まず、皆生温泉の歴史と温泉地の由来ということですが、皆生温泉の歴史と当社の歴史とは一致するところがあります。地名の由来は皆さんご存知かと思いますが、「海の池」と書かれたのが最初です。安土桃山時代になると、皆が生まれる「皆生」に変わったのですが、その理由についてはいろいろな説があります。一つは海の池というところは自殺の名所であったということで、地域の住民が皆が生きるということで皆生にしたという説、もう一つは読み方ですが、単に漢字を知らない人達が「カイケ」と聞いて、役人の一人が自分の知っている漢字を充てたとか、縁起が良いからとか言われてきました。今の皆生は、江戸の末期に統一されたそうです。

皆生温泉の歴史と言えば、うちの会社は1920(大正9)年の創業で、翌年に株式会社になりました。温泉は明治初めの発見ですが、その前から甘鯛のいる所とか、魚がたくさん獲れるとか噂があり、漁師がそれを見つけたのです。当時の村長に清酒5升、一升瓶5本で温泉の権利を売り渡したと言われていました。昔は皆生の海岸線から300mくらい先まで砂浜があったそうです。冬の皆生を知っている方は御存知だと思いますが、物凄い荒波ですね。護岸を作っては壊されるということで資金も底をついたときに、わが社の創業者である有本光太郎さんが全部買い取って、町の区画整理から始めたわけです。しかし、資金が足りず、坂内家の祖父が全部引きうけ

て、今の会社になったのです。

先ほど、山村先生から入浴客数の話が出ましたが、これは入湯税に基づいた資料です。平成10年に当社は新しくお一ゆホテル、お一ゆランドという温浴施設を開業し、皆生温泉の入湯者数の右肩下がりを多少和らげました。テレビの影響が非常に大きいのですが、松江の宍道湖をテーマにした朝の連ドラ「だんだん」は、皆生ではあまり影響を受けませんでした。平成22年の「ゲゲゲの鬼太郎」では一挙に盛り返しました。平成23年は何と言っても東日本大震災ですね。その際、高速道路無料実験化が実施され、誘客にプラスの影響がありました。現在、それが中止になり、年間3万人ほど減っています。

平成24年度は右肩下がりが止まらずに40万人を切り、昨年は出雲大社の60年に一度の大遷宮と鳥取県の植樹祭における天皇皇后両陛下の植樹、エコツーリズムの国際大会などイベントもいくつか続いて、45万人を数えました。なぜ無料高速道路の実験化がこれだけ影響があるかということ、中国・四国の各地から皆生温泉に来られる方の76%は自家用車です。これが非常に大きいので、高速道路無料実験化の中止は痛い。以上が皆生温泉の現状です。今後とも大きなイベントがない限りは、客の減少は続くと考えております。

**山村**：ありがとうございます。皆生温泉の成立と発展にとって、皆生温泉観光株式会社が大きな役割を果たしてきたことが分かりました。

**増田**：タタラ製鉄の会社が安来にあるのですが、そこで沢山の砂鉄を取ってきたので土砂が流れてきて、今の皆生の海岸線から沖合約300mまで土砂で埋まっていたのです。ところが、砂鉄の採取をしなくなって日野川に土砂を流さなくなると、真冬には土砂が浸食されて海岸線が後退しました。温泉の源泉があったところも全部やられたのです。

**山村**：これまでに、温泉確保については先人

の大変な苦勞があり、それが温泉供給会社に引き継がれて、今日の安定した温泉が供給されているのですね。

**増田**：内陸の方に温泉井戸を掘り、現在14本の井戸が稼働していて、58の需要者に供給しています。パイプラインの長さは、約7kmにもなります。

**山村**：只今、皆生温泉についての報告がありましたが、会場から質問があればどうぞ。

**能津**：東海大学の能津と申します。一つ事実確認だけですが、入湯客数の推移の資料で平成10年から24年の数値は宿泊客のみでしょうか。それとも日帰り入湯客も入湯税を支払っているのかどうか、確認させていただければと思います。

**増田**：宿泊者だけです。入湯税に基づいた数字です。

**能津**：ありがとうございます。日帰り客からも入湯税を取っている地域があるものですか、確認させていただきました。

**山村**：皆生温泉には高層の立派なコンクリートづくりの建物が規則的に並んでいますが、これは最初の土地区画の計画が生かされているのですか。

**増田**：昨日、皆さんは温泉場を歩いたのでしょうか。(会場：歩きました)。三条、四条という名前に気付かれたと思うのですが、本社の坂内家は京都にありまして、それに基づいて、三条、四条通という名前を付けて区画整備をしました。区画整備の基を作ったのは初代社長の有本さんです。当時の設計者が作った町づくりの基本となるものを見ていただくと、碁盤の目のように綺麗に区画整理されており、大正初めの当時としては、良い町づくりを考えてくれたものだと思います。

**山村**：皆生温泉は、ちょうど日本の温泉地が大きく発展していく、そういう時代の計画的な温泉地づくりの代表例ですね。それでは続いて、木藤さんに関金温泉についてお願いいたします。

## 歴史ある関金温泉の現状への危機感

**木藤**：関金温泉の現状を報告させていただきます。まず、昨日視察会を行っていただきまして、大変ありがとうございました。この場をお借りしまして、お礼を申し上げます。

石川先生から、皆生温泉で日本温泉地域学会の大会を行うに当たって、関金温泉を視察しようと思っているがとの話をうかがった時に、関金温泉は大変小さな温泉地で、一言で言えば寂れている温泉地です、そのありのまましかお見せすることができませんがよろしいでしょうかと、お話をさせていただきました。そのときに、石川先生がありのままの姿でよいのですと仰っていただいて、本当にありがたいお言葉を頂きました。

昨日、現地を見られた方は特に感じられたと思いますが、関金温泉は一言で言えば寂れている、建物が古い、本当に小さな温泉地です。旅館は4軒しかありません。そのうち2軒を行政が所有しており、民間の指定管理に出している旅館です。残り2軒が個人経営の小さな旅館です。また、関の湯という共同湯が1ヵ所ありますが、3、4人が入れば浴槽がいっぱいになるほどの小さな施設です。その他、日帰り入浴施設として湯命館という建物が1ヵ所ありますが、関金温泉はこれらの温泉施設で構成されています。

宿泊客数も先ほどの皆生温泉の資料を見ながら、本当に桁が違うと言いますか、年間1万4,000人ほどであり、近年では横ばいか右肩下がりとなっているのが現状です。

私がこの仕事に携わって4年目になりますが、当初の旅館組合は活発ではありませんでした。旅館組合の総会があるので、行政からもとということでオブザーバーとして参加したのですが、大愚痴大会といえる感じの大会で、まあ飲んでお終いとなりました。1年間の事業計画は、その時だけというような総会でした。そうした中で、私には関金温泉を何とか残したいという思いがあり、その取り組みについて旅館組合と話をしてきた訳です

が、その話は後ほどいたします。

昨日、温泉地を視察された方は一部の温泉しか入れなかったと思いますが、温清楼という関金温泉で一番奥に大きな旅館があります。そこのお湯は自噴しているのですが、その旅館が3年前に廃業して、お湯は湧き出ているものの、使われないまま排水溝に流れ落ちていくという現状がありました。温泉旅館が廃業するという事は、温泉に入る機会が失われることと全く同じ意味なのだと、建物、旅館を見ながら思ったわけです。

現在、関金温泉にある4軒の旅館のうち、2つは民間の旅館です。2軒とも60歳台の高齢者が経営しているのですが、今後10年を見たときに後継者がいるのであろうか、いない中で10年後に仮に2つの旅館が廃業したときに、関金温泉の行政が所有している公営旅館2軒しか残らなくなるわけです。その際、行政が建物を踏襲し、ずっと続けて維持していくのであろうかと、私は行政マンとして考えたときに、おそらくいつかは手を引くときが来るのではないかと思うわけです。関金温泉から宿泊施設がなくなるということが、今後10年の間に起こるかも知れないのです。その時に、温泉地の定義と言いますか、温泉と宿泊施設があるということが、温泉地であることの理由であると思うのですが、関金温泉という名前が地図上から消えてしまう可能性があるのではないかと感じました。

そういう状況にはしたくないと思いながら、今いろいろ取り組みをしています。関金温泉は1300年の歴史があると言われていますが、これまでにおそらくいろいろな課題があったと思います。その間に、誰かが守ってくれていたから、いま関金温泉に入れると思うのです。私の代に温泉と温泉旅館をなくしてはいけない、今後1300年も続いていくように何とかしたいと思っているのが現状です。

地元の人と話をすると、関金温泉をあまり誉めないというか、地元の人が自分の地域の

温泉をあまり良く言わないのです。関金温泉に行くより、三朝温泉に行く方が良いと言っているのです(笑)。自分の大切な友達やゲストが倉吉に来て、どこか良いところはないか、泊まる場所はないかと聞かれたら、三朝温泉を紹介する人が多いのです。それは自分の町にある、足元にある温泉を誇りに思っていないということで、大変悲しいことです。私は、地域の人々が誇れるような温泉地として存続させていきたいと思っておりません。

山村：ありがとうございました。配布資料を見ますと、関金温泉は1250年の歴史があり、ラジウム含有量日本屈指、国民保養温泉地、日本の名湯百選に認定、療養保養に素晴らしい温泉地であり、その美しさでは鳥取一と言われているとあります。これを見ただけで是非行ってみたいと思いますが、どうして多くの地元の人が身近で温泉の恩恵を受けていながら、温泉経営には関係ありませんと言うのでしょうか。地域の一体感が本当に欠けてきているのですね。

関金温泉が国民保養温泉地に指定されていることは大きなメリットであると思います。現在、環境省が指定の見直しをしているのですが、継続する温泉地がほとんどです。私も昨日うかがって、温泉そのもの、歴史性を感じる文化施設や落ち着いた環境など、本当に良いですよ。神社、仏閣、お地藏さんも素晴らしい。ゆっくりと散策をし、温泉に浸かって心身を癒す場として最適な場所だと思います。

それでは、三朝温泉について御船さん、よろしくお願ひします。

### 放射能泉の名湯、三朝温泉の構造改革

御船：三朝温泉の現状と特性ということで、話をさせていただきます。三朝温泉は皆さん御存知だと思いますが、ラジウム温泉(放射能泉)です。古くからの温泉地ですが、源平の頃の文献しか残っていないので、今年は開湯850年祭を迎えます。本当はもっと古くか

らあったらと思うています。温泉場から8kmほどのところに天台宗の三徳山三佛寺があり、そこは1300年祭をしました。

三朝温泉ですが、ご多分に漏れず全国の温泉地と同じくピークは平成8年で、現在の宿泊客数は半減しています。戦後の温泉地の動向を見ますと、まず国鉄を利用して客を大量に受け入れ、国民に憩いの場を提供してきました。地域の活性化を図っていく中で各地の温泉地が団体列車で客を受け入れ、次いでモータリゼーションの時代となって高速道路ができる、客が団体バスで来るようになりました。そして、高度成長期を経てバブル期となるわけです。金融機関の勧めにしたがって、施設を拡充した旅館から潰れております。

旅館は装置産業で、設備投資を要する産業です。返済に20年くらいかけているのですが、その間に経済環境も変わるのです。その時のニーズですと行ける訳はないのに、平気でやってこられたのは、昭和の時代の高度成長、右肩上がり、常に売上が伸びていくということでクリアしてきたわけですね。その集大成というか、最悪の事態になったのがバブルです。高くて何でもありなら良いという形で、折角築き上げた温泉文化というもの全部吹き飛ばして、高額なものを作ってしまった。御多分に漏れず、三朝温泉でも観光経済新聞社が毎年行っているホテル旅館百選のベストテンに入る宿が2軒倒産しました。時代の流れに沿って郊外店を出したところも即潰れました。二転三転して、今はインド人のグローバル企業が経営しているところもあります。このように、三朝温泉も荒波を受けております。

三朝温泉はラジウム温泉で知られています。それは大正時代のパリ万国博覧会で、キュリー夫人が発見したラドン、放射線を発表されたのですが、日本の科学者の先生が、三朝温泉にも負けないくらいの含有量の温泉があると発表して有名になったのです。

その後、野口雨情と中山晋平による三朝小唄がヒットし、京都のマキノ映画社によって映画にもなりました。無声映画の頃ですが、これが日本で最初のラブストーリーとして大ヒットしました。こうして、三朝温泉は有名になり、湯治場から観光の温泉地へと変わっていく訳です。昭和時代に入ってから大型旅館がぼつりぼつり、第二次世界大戦後に各種の旅館ができました。一番問題だと思いたいの、観光という概念がすっかり変わったことですね。それまでは、見所はここです、こんな所を巡りますと、観光コンテンツのブラッシュアップがなされていたわけです。しかし、戦後になると温泉場は遊ぶところであり、宴会をして町場に繰り出し、町の施設はみんな2次会、3次会の場へと変わりました。芸子の見番も新見番と旧見番の二つがあり、置屋は30軒、芸妓は200人以上もいました。ソープランドが3軒、ヌード劇場が5軒、コンパニオンクラブが20社あり、秋のシーズンには芸妓を3ヵ月前でも予約できないという状況でしたが、今は一人もいません。コンパニオンを頼むには夕方に呼べば十分です。ソープもなく、飲み屋もほとんどありません。

今、三朝温泉は1泊2食の宴会歓楽型の温泉地から転換を図っているところです。町の施設も観光客を対象とした店が少なくなりました。私は今、若い人達の新しい感覚のもとに、現代湯治というものを一生懸命提唱しています。旅館も早く考えを変えなければならぬということです。2年前に「コンテンツからコンクウェストデザインへの転換」というタイトルで、温泉地への提言本を出しました。今、その実現を図っていますが、人の意識を変えていくことは非常に難しいのです。また、財務を改善するのは10年くらいかかります。ただ言えることは、三朝温泉にはダイヤモンドの原石がごろごろしています。その石に座っていて「何もねえよなー」って言うている人が、まだまだいるのです。ただダ

イヤモンドの原石だといってもお金にならない、ティファニーにはならないのです。磨いたら普通のダイヤモンドですけど、もっと良くしてブランド性を付けないと、ティファニーにはならないので、そこを今一生懸命やっているところです。

もう一つ観光的なことを言いますと、中国地方の温泉地、観光地はだいぶ落ち込んでいます。行ってみようかというインセンティブ、動機付けになるエリアはどこかと言ったら、中国地方5県の中でも2ヵ所しかありません。厳島神社のある宮島と縁結びの出雲大社です。この二つ以外は、みんなが行ってみたい目的地ではなくなり、中国地方の観光地は大変なことになっています。そういう状況の中で、前向きに取り組むのは今しかないのです。

**山村：**ありがとうございます。以前、三朝温泉で町当局と商工会が一緒になって町づくりを進める中で、「湯の町ギャラリー」を展開しましたが、その話をお願いいたします。

**御船：**「湯の町ギャラリー」というのは、商工会がベースになって町の活性化を図った事業です。宴会型で旅館の中に客を閉じこめることを変え、少しでも町に出ていただき、旅館、商店、個人が持っている宝物を表に出して、ウィンドウショッピング風に見ていただきましょう、町歩きをしていただきましょうというものです。これは今もやっております。

**山村：**もう一点ですが、三朝温泉はかつて国民保養温泉地に指定されていましたが、これを返上しましたね。非常に珍しい例なのですが、その事情をお伺いしたいと思います。

**御船：**ある週刊誌が、ソーブランドなどのある温泉地が保養とは何事かと書いたのです。日本のマスコミは、ヨーロッパの保養地について病院とかりハビリ施設、図書館などというところしか出さないのです。ヨーロッパの保養温泉地に行きますと、ドイツなどでは健康保険証が使えるし、カジノもあります。し

かし、日本での概念は少し違っており、返上したのです。私がまだ子供の頃で、先代がやったことなのです(笑)

**山村：**今、国民保養温泉地の見直しが行われています。かつてはある程度予算を組んでいましたが、それも遊歩道を作ろうとか、施設整備などのハード面に使われたのです。ソフト面に意が注がれておれば、滞在型の保養温泉地として安定したと思うのですが。

その他、御質問がありましたら、お願いします。

**会場質問者：**三朝温泉の現状についてお聞きしましたが、2011年の3.11の大震災の影響はかなりあったのでしょうか。また、今もあるのでしょうか。

**御船：**3.11よりも民主党政権の対応が随分こたえました。阪神淡路大震災の影響は大きかったのですが、3ヶ月から半年で回復しました。リーマンショックは1年ほどかかりました。東日本の方は、私たちにとってはあまり影響がないようです。北関東・東北というエリアからは、これまであまりお越しにならなかったのですが、今はとても増えています。一度来られるとリピーターになりますね。

**山村：**その他、質問はございませんか。

### **放射能泉の風評被害の克服**

**浜田：**私は日本温泉協会の編集委員をしているのですが、3.11のときに放射能が怖いということになって、これでは拙いと思い、放射能泉の特集をしたことがあります。その放射能泉という名前だけで過剰に反応するということは、あれ以来起きたのでしょうか。

**御船：**実は、ありがたい質問でして、福島事故があった時に、シーベルトというのがあり、自然界にあるものも、人工的に作られた放射能もみんな引くくめて全体量で何ミリシーベルトとなり、大変な影響を受けました。首都圏の小さなエリアで凄い数値が出るホットスポット騒ぎがありましたが、一生懸命探している人たちがいて、あったと言うと先ずそこに行くわけです。床をはぐってみた

ら、蛍光塗料の元になっていたラジウム含有の蛍光塗料だったと。それで、フジテレビとTBSがすぐ飛んでいきました。ところが、そのレベルになると対応できないので、結局私の所に来ました。正しい知識を放送していただくという条件で受けましたが、風評被害のおかげで半年間、経営が干上がりました。その分、逆にどんどんホームページに書きました。

数値を申し上げますと、0.24マイクロシーベルトで除染しなさいと言われてますが、私の温泉の数値を言いますと、飲泉用の温泉の蓋をしておりまして、一晩で1.72マイクロシーベルトになります。これは直ちに避難しなさいという数値です。お風呂に入っただけの高さで0.22出ています。しかし、これはラドンなのです。それを吸収するとホルミシス効果で元気になっていく。でも、一般の人は一括りに放射能なのです。世界の中で、日本だけがみんな駄目なものだというイメージを作っています。ヨーロッパにしてもアメリカにしても、予防医学で細胞を活性化して免疫力を高くしています。微弱放射能によるホルミシス効果ということで、国を挙げて本気で取り組んでいます。病気をしない、怪我をしない、医療費が下がる、生産性が上がるということです。それに蓋をすどころか、駄目だよというイメージを植え付けているのは日本だけで、困っています。これで半年やられました。

**浜田**：私、実はこの資料にも書いてあるバートガスタインのラドン坑道療法の院長と友達なので良く分かっているのですが、正しい情報を伝えていくしかないだろうと思います。ただ発想として、どんなに少なくとも害があると考えなのか、一定以下のものに関しては逆に害がないとするのかです。例えば、塩とか水だって取りすぎれば害がある。一般には塩とか水を害と呼ばない。放射能にしても、基本的にはそのものがあるではありませんか。例えば花崗岩があったら当然放射能が出ているわけです。放射能泉の作り方は、人工

的には分かりますけれど、そういう情報が足りないという気がします。この場合の対策の方法は、普通の温泉地にも適用できます。風評被害があった後に、それを乗り越えていく時のやり方は、別に放射能泉とは限らず、どこか普遍性があり、他の温泉地にも適用できるノウハウみたいなものがあるのでしょうか。

**御船**：解決方法のところでは言おうと思っていたのですが、最後のところの手の内を言いますと、実はラジウム(ラドン)温泉に関しては医学的なエビデンスが出ています。ただ、日本のお医者様というのは温泉医学にあまり本気にならないのです。格好いいところの表面上の研究はされるのですけれどね。ヨーロッパではすごく進んでいます。岡山大学と日本原子力開発機構とバートガスタインの医科大学の報告に、ここのエビデンスが載っています。

今、三朝温泉では入浴指導員のラジウム利用は、これを基に岡山大の三朝医療センターの病院長のレクチャーを受けて、最後は私がこんな風にやっという報告をするのです。エビデンスに基づいて、お客様にアドバイスをしております。ただ、どんな温泉地にも良いかという、これはラジウム温泉に限ったこととして、放射線被害、風評被害の温泉地には有効だと思っています。そういう連携もしています。

**山村**：その他に、よろしいですか。

**浜田**：一つだけお願いします。その話を関金温泉の方に振りたいのですけれど。ラドン温泉だったらこういうことをしましよと、昨日行った関金温泉では、湯中運動をやらされましたよね。あれは誘客とかリピータを増やす効果は出ているのでしょうか。

**木藤**：お手元に関金温泉プラチナプロジェクトという図を配らせていただいています。関金温泉で取り組んでいる湯中運動は、健康というところに組み入れています。簡単に申し上げますと、温泉浴槽で腰湯をしながら、手足を

動かして血流を良くし、体のバランスを整えていくという運動です。領域としては、保健の分野になってくるかと思います。医療だけではなくて、病気になる体を作ろうということと、病後、体が治った後に再発しない体を作ろうということです。膝が痛い、腰が痛い、慢性的に血圧が高いなどの方に来ていただいています。観光客を目的としたと言うよりも、むしろ地元の方がもっと利用しやすい温泉地を作っていきたいということで取り組んでいます。リピータのために教室を開催しており、毎週水曜日と木曜日には自主サークルが立ち上がっています。毎回10名くらい集まっており、その方々は湯中運動がなければ、おそらく関金温泉には来なかったであろうと思います。そういった方が新しく関金温泉の利用者として定着していると考えています。

**山村：**各温泉地の課題を含めて、いろいろとお話をいただきましたが、今後の温泉観光振興策、これは是非具体的にお話をいただきたいと思います。

皆生温泉からお願いします。

### 皆生温泉の観光振興施策

**増田：**配布資料にある米子市の「ICE認知症予防プログラム」、先導的な「低炭素・循環・自然共生」ということが成果の一つです。米子市には鳥取大学医学部附病院があり、日本の国立大学附属病院ランキングで常にトップクラスにあり、財務能力ではベスト5、頼りになる大学病院ランキングはベスト3に何度も入っています。40万の人口しかない全国最小の県の大学附属病院が、全国のトップクラスの技術や設備を持っているのです。我々はこれを温泉地の活性化に活用できないかと考えています。

学会誘致については、松江の方が予算的配慮や近くに著名な松江城、出雲大社をはじめ宍道湖温泉などがあり、幹事の先生方は拠点性のあるワンストップサービスを求めているのです。こうした動きに対して、米子は非常

に後れを取っています。一昨年は2,000人くらいの循環器系の学会が松江に持って行かれたのですが、その時に今後は自分たちで積極的に皆生温泉への学会誘致に尽力しようと、仲間3人で考えています。

それと、次の認知症予防プログラムは、先ほど関金の木藤さんからも出ていましたが、いわゆる温泉が非常に体に良いのだというエビデンスをどうにかして取れないかということで、三朝温泉でそのエビデンスを岡山大学と協力して取ったということです。しかし、先ほど御船社長も仰っていたように、お医者さんというのは「1足す1は2でなければいけない」と、「温泉のようなもので体が良くなるのはおかしい」ということです。我々も外資系の航空会社にいた頃は海外でもいろんな温泉施設を見たことがあります。日本以外のところでは、ホリスティック・ウェルネスといって、予防から治療、最後のリハビリまで一つのところでやるのが常識です。

しかし、日本の場合はどうも医者は治療をするのだと言い、リハビリや予防は別だということが非常に多いのです。本来なら一カ所で全部できるものなのですね。それでエビデンスが欲しいと言うことで、お医者さんを何人も当たっているのです。なかなか難しい中で、実は鳥取大学に何人か有名な認知症予防の先生がおられるのです。その中のお一方が、あなたの認知症がどのレベルまで来ていますよと、タッチパネルでお年寄りにやらせるのです。あなたは認知症の予備軍です、あるいは認知症の1ですよ、2になっていますよという評価システムを作ったのですね。これを利用して、温泉に入る前と後のエビデンスをうちの会社で作ってほしいと、今少し進めているところです。

次に、今流行の里山プロジェクトではないのですが、里山エネルギー・マネジメントシステムということを考えています。東京農業大学と組んで、化石燃料を使わず、大山を初め山は幾らでもあるので普通の間伐材や松食い

虫にやられた松を利用し、地産地消ということで会社にとってはこれまでの燃料コストの半減化を図っています。

こういうことを進めることによって、地域全体が変わってくるのではないかと思います。観光だけではなく、温泉だけでは人は呼べないということを踏まえつつ、地域の雇用レベルを再構築することですね。米子市の観光課にお願いして、マーケティング・アクションプランを作るときに絶対必要ですということ、SWOT分析をしてもらったのです。関金温泉でもあったように、地域住民そのものが温泉を知らない、市民が地域の動きを知らないということが結果として出ています。

こうしたことを次から次へと実施して、地域住民のみならず日本中の人々の意識をこちらに向ける、あるいは認知症に至っては世界の何千万になるであろう方々のためになることを、山陰の15万人ほどの小さな市から発信できれば良いと思っています。温泉だけでは無理ですので、ここにボロウイング・パワーって書いてあるのですが、パワーを借りるということなのです。自分たちだけの業界内部でものを考えないで、堀を取り払って他の業界の方とも組んで考えていかねばならないということで、アイデアを出しています。

**山村：**貴重な御意見を頂きました。フロアーから温泉地の活性化について、御意見がありましたらどうぞ。

**能津：**東海大学の能津です。いろいろな取り組みを皆生温泉だけでなく、関金温泉でも三朝温泉でもやられているのですが、それ以上のものを新たに何かって言うことを私は求めるつもりはありません。特に関金温泉では、湯中運動について地元住民を対象に行っているということですが、これを長く続ける継続性が必要かと思います。と言いますのは、今比較的元気のよい温泉地というのは、その流行る前に下積みの期間が結構長かったりすることがあるのです。つまり一時的に宣伝すれば、一時的にお客さんはたくさん来

てくれるかも知れない。でも事業の継続性という点で考えると、難しいところがでてくる訳です。皆生温泉のトライアスロンなどは目立って見えるのですが、実はものすごく地道で長期的な視点に立った活動ですので、そういったことを先ずは続けることが重要ではないかと思います。

それから、日本の観光学において一番欠けていると思われるのが、需要についての分析です。どういう需要があるのか、あまり見えないような気がするのです。観光の関係でよくあるのは、こうやったら儲かりますよと、すぐに答えを見つけ出すということになりがちなのですが、それ以前に客の需要がどこにあるのか、その需要がどこから来ているのかといった分析を踏まえることが必要です。それに対して、自分たちの地域はどうやってその需要に応えることができるのかという視点での研究が、今後もっとなされてもいいのではないかと思います。この点について、自戒を込めて申し上げたいと思います。

**増田：**ありがとうございます。我々もいつも考えていることですが、わが社は温泉供給会社として引っ越しすることはできません。ですから何か良い事業計画があっても、この地に根を置いてやらざるを得ないので。また、人口は2040年には30%近く減るわけですから、地域に密着しているだけの事業計画では会社を維持していけません。しかし、ここから一番近い観光市場は実は東京なのです。飛行機で1時間15分です。鉄道利用では、岡山2時間半、大阪、京都、神戸は3～4時間です。東京に発信できるような何かをこの地から生み出すというのが大事であると考えています。

**山村：**それでは、次に関金温泉についてお願いします。

### **関金温泉グランドデザインを作成**

**木藤：**関金温泉の課題と取り組みについて、少し駆け足になりますが紹介したいと思います。

先ほどの現状のところ、地元の人が温泉を誇りに思っていないのではないかとこのことを提示しました。そこで、まず地元民がいかにして自分たちの温泉地にしていくのかという取り組みが重要になってくるわけです。昨年一年かけて関金温泉グランドデザインを作りました。この取り組み計画は、地域の方がもっと温泉地について考え、関わってほしいという視点で作ったものです。ワークショップを合計15回行い、延べ600人以上が関わって作りました。この特徴として、グランドデザインというと壮大な計画を想像しますが、地元の方々の手の届く範囲の計画書を作りたいという考えのもとに作成しました。まさにその通りで、いろいろな夢は語れるけれど実現できなければ意味がない、実現できたときの達成感が地元民のやる気、次に繋がって行くという視点で作りました。

グランドデザインという名前が付いていますが、事業計画に近いものが出来上がっています。その特徴として、こうした計画を作るときに10年後を予測して作るのですが、面白いと思ったのが、10年後を決めると今の行動が制限されて面白くないと言う人がいて、確かにその通りだと思いました。これから未来を作っていくもので、今明確にしないで良いという考えなのです。例えば持続可能な関金というのが、このグランドデザインの将来像です。10年後の未来とかいうのは、言葉にしなくても人それぞれ違うものだし、胸の内にしまっておいて良いのではないかとこの考え方です。それではバラバラになってしまうという反論がありますので、「例えば持続可能な関金」を一つのテーマとして作り上げたらこういうものができましたという取り組みでまとめています。その基本姿勢として、まず「無理せず、楽しく、できることをやってみよう」ということです。これは関係者すべてが共通認識として持っていることです。

その一つとして、去年の秋に手作り文化祭

をしました。ポスターも手書きの手作り、ホームページとフェイスブックで集客をして、昨日関金温泉を御覧になった方は分かると思いますけれど、ほとんど人が歩いていない温泉街で、そこに千人の人が集まるというイベントをしました。その時、地域の住民が一番驚かれたのですね。地域の方が自分のできることを少しずつ出し合うことで、こんなに大きな力になるのだという成功体験になりました。温泉地の活性化策として、健康面では、先ほど湯中運動の説明を少ししましたけれど、先ずイメージ図というものを載せております。持続可能な取り組みにするというのはすごく難しいテーマであり、大体行政との切れ目が事業の切れ目みたいなどころあるのですが、まさに持続可能な仕組みを作ろうと今頑張っております。

去年から取り組み始めて、今年は2年目に当たるのですが、地元のリーダーを育成し、自主サークルとして運営していきけるような態勢を整えようと努力をしています。毎週水曜日と木曜日に自主サークルが立ち上がり、今年のリーダー養成と新規の教室も起ち上げており、リーダーが増える見込みです。

また、温泉だけで集客をするのは難しく、温泉地を中心にして周辺の自然環境などを含め、魅力として発信していくところです。グランドデザインではなくて、自然とか農業とか、農家とかそういった方と連携をして、農業体験ができるような仕組みを作っております。そういったところを一体的に見せていく中で関金温泉を元気にしていくと共に、関金温泉がもっと地元の方の誇りとなるような、なんと言いますか、寂れているし、古いけれども、良いところだよと言ってくれるような温泉地を作っていきたいと思っております。  
山村：ありがとうございます。それでは最後になりましたが、三朝温泉について御船さん、よろしくお願ひします。

#### マーケットインが大事なポイント

御船：東海大学の先生から、客の誘致につい

て非常に大事なポイントをうかがいました。アドバイスをありがとうございます。マーケットインとダイレクトインがあるんですね。我々はほとんどがダイレクトインで、これだけ売り上げたいと思えば、一番陥りやすいのが、コンサルタントに依頼すると儲かると考えることです。ほとんどと言って良いほど失敗しています。依頼しない方が良いですね。

お客さまが、例えば三朝温泉に何を期待して来るのか、分かるのが難しいですよ。ですから、他人様が喋る言葉に耳を傾けていると、ヒントがいっぱいあるのです。ただ自分たちが聞き漏らしているだけなのです。とにかく、アンテナを張っておくのが大事かと思えます。それとイベントというのが私は嫌いです。ほとんど行政の人がやるのがイベント型で、これも失敗です。税収が落ちている中で、お金をそんなところに使わないで貰いたいと思います。イベントってというのは打ち上げ花火ですから、何分で何百万かが消えるのです。そんな使い方は止めましょうということです。

それよりも、そこの持てるもの、地域、旅館、温泉地などで何が提供できるか、それからお客さまの方がその地域、宿、温泉地に何を求めているすかというマーケットイン、これをしっかり調べるのが大事ですね。今ほとんどがインターネットの世界になっており、コンサルタントに頼まなくても教えてくれるサービスがあります。

今後、三朝温泉は何をするのかと言えば、三朝温泉の最大の特徴はラジウム温泉を活かさなくて何を活かすのか、です。実は岡山大学が三朝温泉に来てくれたのは岡山医専と言っていた時です。鳥取大学医学部の鳥取医専ができる前に岡山医専ができたのです。だから鳥取県の三朝温泉に岡山大学の施設があるのです。この施設は医療の研究と物理学の研究とに分れており、今、物理学では世界的な施設となっています。

受ける話をしますと、イトカワの微粒子

(「イトカワが持ち帰った微粒子が岡山大学地球物質科学研究センターに」と言う意味か)の8割が三朝温泉の研究所にあります。この前、隕石がロシアに落ちましたが、その隕石も三朝にあります。温泉の研究は、温度・濃度・成分・量・ガスなど、いわば地球の血液検査ですから、星の物理学にもなるのです。ところが、医療の方でもどんどん進んでおり、何十年という研究の集大成に対して、内閣府が予算付けをしてくれたのです。そして、現代湯治の研究を始めて5年が経ちます。具体的な準備に入ったのが3年前、下準備が5～6年前、構想は30年前からありました。約40年前に健康開発財団と一緒にやりました。東の鹿教湯温泉は継続して成功しましたが、三朝温泉は潰れました。これは東京と大阪の違いです。

この温泉研究所は日本で唯一だと思いますが、メディカルチェックプランがあるので。現代湯治と名乗って良いという旅館だけが、これができるのです。大学病院、岡山大学医療センターと三朝病院(前国立温泉病院)で予約の受付をしています。これは温泉と地域と医療の連携、ここですと再生治療の連携で生まれたものです。病院の方に通われる客は、氷山の一角です。大学病院の後ろ盾のエビデンスがあるということが、皆様にとっては非常に心強いことなのです。

多くの温泉地の方が来られます。しかし、大学病院のエビデンスを取ることはできませんでしたと言われます。本当に難しいのです。ほとんどの方が病院とあまり関わりません。では、誰がフォローアップしてくれるのですか。そこのところに携わっていないと、うまく行きません。そこで生まれたのが、この「ラジウムリエ」というものです。

こうした命名は、会議では本当に決まらないのです。温泉入浴指導員とか指南役とか、先輩の温泉地さんが名前を付けていますが、面白くないですね。アイデアが出ないのです。会議室は禁煙ですから、喫煙室に行

ったらふっと出たのがラジウム温泉の温泉ソムリエ、短くしてラジウムリエだと、すぐ決まったのですが、実はこれは大事なことです。

入浴の仕方からいろいろなことを教えて貰います。しかし、最も大事なことは、お客さまが自分はここを治したいとか、こういう風に元気になりたいとか、疲れているがどうしたらリラックスできるかとか、自分に取っての温泉地の過ごし方を求めて来られます。そのお話をしっかり聞いてあげること、こんな過ごし方ができますよとアドバイスしてあげること、悩んでおられたらちょっと背中を押してあげて一歩踏み出してやってみませんかということ、旅館の入浴指導員制度のラジウムリエがやっています。

お客さまは、最近よくお越しになるのです。だから始めよう、ということでは見抜かれます。その程度なら知っているって、観光協会の事務局にお叱りが来ます。ですから2年前に、いい加減なことをやるのだったら、現代湯治の看板を返して貰うと言いました。一生懸命やっているところの足を引っ張らないでくれって。ただ治療、療養だけを目的とするのではなくて、パートガスタインとかバーデンバーデンのようなウェルネス・ステイを求めるヨーロッパ型の温泉地を思い出していただきたいのです。とくに都会の人は疲れていますので、リフレッシュをしたいのです。いつでも寄れる温泉地が一つ二つあっても良いのではないかという気がします。鳥取県に三朝温泉、関金温泉や皆生温泉があるよ、だから頑張れるという人がいても良いと思っています。こうした目的で海外旅行に出かけている方もいるのです。その国内版があっても良いと思うのです。その際、どういう情報を提供し、アドバイスをするのかということが一番大事だと思っています。

**山村：**ありがとうございました。各地の温泉地にも共通する貴重な御意見ですね。

日本温泉協会による温泉客の温泉利用と志

向性に関する継続的な調査結果では、客が温泉地に期待するものは、常に「温泉資源」、「温泉情緒」、「自然環境」の良さの3つに集約されます。日本の各温泉地は、それぞれの地域性を活かして個性のある温泉地域づくりに取り組むことが大切です。その際、温泉資源の保護と環境保全を図るとともに、高齢化社会を踏まえて滞在型保養温泉地の再生、温泉地の歴史文化の掘り起こしとその地域ガイドの実施など、温泉客の志向性に合わせた温泉地域づくりが欠かせません。そのためには、温泉地の情報発信と正確な地図を作り、ガイドシステムを確立することが求められます。業界・行政・地域住民の一体感を確立すること、地域が一体となって温泉客に物心両面で最高のサービスを提供することに尽きると思うのですね。

本日は短い時間でしたが、多くの学会員の参加のもと、パネリストの方々による鳥取県の各温泉地の現状と今後の取組みなどについて有益なお話をいただきました。誠にありがとうございました(拍手)。

(本稿は録音担当の浜田眞之理事長の尽力のもとに司会の山村がまとめた。)

## 書評①

「命をつなぐ“おもてなし”」編集委員会編著：  
『東日本大震災、全旅連の記録 命をつなぐ「おもてなし」  
旅館・ホテルの役割と挑戦』

全国旅館ホテル生活衛生同業組合連合会 213頁 2014年6月  
定価 1,500円(税込)

2011年3月11日の東日本大震災から約3年半が経過した。この災禍は、東京電力福島第一原子力発電所事故を伴うために、現在、地震や津波の自然災害に関する報道等は減少傾向にある。当学会では、翌2012年3月発行の『温泉地域研究』18号で「シンポジウム 東日本大震災復興支援」を載せ、温泉地の被災者の受け入れ活用等について触れている。

全国旅館ホテル生活衛生同業組合連合会は、東北・関東の1都10県を含む編集委員会を編著として本書を刊行した。災害時における旅館の果たした多様な役割という事実を、社会貢献として次代に活用すべき要素が数々あることから、災害時における旅館の役割と地域での位置づけを、住民の防災と避難の見地から明確化することなどを意図している。

本書は2つの章からなるが、「1章 絆、輝く」の冒頭では、同連合会会長が、3月11日の東京で被災した時からの日誌が簡潔にまとめられている。地元の山形への帰路の中で新潟県理事長が語った2004年の新潟県中越地震の経験談、政府、省庁、地方自治体、旅館3団体等の会議等が要約され、また、年度末を控えた旅館・ホテルでの金融面の融資対策、税制、雇用のほか風評被害等の対策措置等も言及されている。

次に、「社会貢献としての二次避難所」を項立てし、高齢者や障害者等の災害時要援護者だけではなく、被災者全員を長・短期で受け入れた実績を数値等で示している。更に、

編集委員会11都県連の各々の動きを紹介の後、「4つの形で社会貢献した旅館」を章末にまとめている。「地域の自然発生避難所」「二次避難所を受け入れ」「様々な対応をした旅館」「原発と旅館」の4タイプだが、特にここでは、市町村が策定する地域防災計画で指定の災害時避難場所は、未曾有の災害だった東日本大震災では計画どおりに機能せず、旅館・ホテル、特に、温泉旅館が「温かい食事と暖かい温泉の提供と家族単位の部屋の提供」を行ったことを触れながら、具体的な旅館の取組み等を交えてまとめている。

「2章 絆、護る」は、4つの項立てで構成されている。災害に備えた自助努力や事業継続計画等の旅館側の備えのほか、公的支援や法制度、更に、今後発災が予測される南海トラフ、首都直下地震等を踏まえた国土強靱化、耐震化等の政策も視野に「命を守る拠り所」「命を継ぐ拠り所」である、旅館の果たした公的な避難所の役割を言及している。

本書は、主に旅館関係者・関係団体向けの著書だが、「絆のアルバム」や「関連ショートコラム」等もあり、読みやすい編集である。これまで発行された書籍・雑誌・写真集等とは異なり、いわば旅館関係者の実績集と言える。広域災害の難しさをとらえ直す契機になることから、行政関係者や関連分野の研究者等にも参考となろう。

(岡村慎一郎)

## 書評②

佐々木信行著：『温泉の科学—温泉を10倍楽しむための基礎知識!!—』

SBクリエイティブ(株) 238頁 2013年12月  
定価 1,200円(税別)

著者の佐々木信行氏は現在、香川大学教育学部教授で無機化学が専門、日本温泉学会と日本温泉地域学会の会員でもある。

本書は、著者が四国新聞に連載したコラムを基にまとめられたもので、副題に、温泉を10倍楽しむための基礎知識、とあるように、温泉の科学全般を広くわかりやすく解説したものである。カラーの図や写真が豊富なので、電車の中でも楽しく読めて、しかも温泉に関する知識を深めることができる。ここでいう「温泉の科学」の「科学」は、「サイエンス」とすると自然科学を意味することが多いが、ここでは、著者が「はじめに」に述べているように、「温泉の科学」としたのは、「温泉を自然科学、医学を扱う研究対象であると同時に、社会科学や人文科学を包含した複合的な分野、領域と考えた」からである。

内容は、第1章 温泉とは、第2章 温泉の性質と分類、第3章 温泉の分布と熱、第4章 温泉の効能と利用法、第5章 温泉の起源と変化、第6章 温泉に関する規約、第7章 温泉の利用と管理、第8章 温泉の文化と芸術、第9章 温泉の名物、第10章 現代の温泉と未来、となっている。最初から順番に読んでもおもしろいが、興味ある部分から読んで理解できるようになっている。索引も充実していて便利である。

いくつか興味深い内容をあげると、第2章第3節の温泉の浸透圧による分類では、人間の体液は食塩水の濃度8.8 g/L(生理的食塩水)の浸透圧に相当するので、これに近い温泉の溶存物質総量(8g/kg以上10g/kg未満)をもつ温泉を等張性温泉という。また、温泉分析書にある「ミリバル」という温泉成分の濃度を表す単位についての説明など、なるほ

どと思わせる解説がいくつもある。第7節の放射能温泉では、「適量放射を有効活用」とし、放射能、放射線について解説している。第4章第6節の「怖くない放射能温泉」においても、微弱な放射能は「あまり心配する必要はありません」と著者の考えを述べている。

第3章、第6節の温泉沈殿物では、放射能をもつ北投石を写真入りで紹介しているが、著者は秋田県玉川温泉の北投石を長年研究してきている専門家でもある。また、第3章第4節の地熱の有効利用—地熱発電と副産物—では、地熱発電の有用性と問題点について述べている。コラム「地震と温泉」では、温泉に及ぼす影響には、地震前と地震後があり、2011年3月の東日本大震災が温泉に与えた影響についても、自らの観察を交えて述べている。

その他、第4章では、温泉の効能他、時間湯、蒸かし湯、岩盤浴、飲泉など様々な温泉利用法、第5章では、トルコの温泉に生息し人間の皮膚に集まるドクターフィッシュ、第6章では、温泉権をめぐる訴訟、温泉法の改正、温泉の天然記念物の現状、温泉と環境、第7章では、温泉ガス事故、温泉スケール対策、レジオネラ属菌対策、第8章では、温泉と文学、温泉と音楽、第9章では、温泉土産、温泉の建物、第10章では、温泉と観光、異文化交流、温泉学の将来、について述べている。

以上のように、本書は、専門的な図表やデータは省いているが、豊富な写真と簡潔な文章により、いわば『温泉の百科事典』(丸善、2012年)の“新書版”ということができ、温泉に関心のある多くの方々に推薦したい。

(長島 秀行)

## 書評③

## イザベラ・バード著・金坂清則訳：『完訳 日本奥地紀行』（全4巻）

平凡社東洋文庫 第1巻391頁、第2巻439頁、第3巻415頁、第4巻446頁 2013年1月  
定価 1巻3,000円、2・4巻3,200円、3巻3,100円（税別）

千年とは言わずとも百年、二百年前の日本の姿はどうだったのだろうかと思いを馳せてみようとする、意外に日常茶飯の当たり前のことは当時の日本人は記録を残していなかったりする。外国人の記録というのは見るものすべてが異国情緒そのものであるから、偏見はあっても実に面白い。

明治初年に日本を旅した英国人女性イザベラ・バードの“Unbeaten Tracks in Japan”の完訳全4巻が平成25年1月に東洋文庫として上梓された。この原著はインターネットでも見ることができるが、それは簡略版であり、そちらも同じく東洋文庫から『新訳 日本奥地紀行』として平成25年11月に出版された。なお昭和48年に別の訳者の手になる『日本奥地紀行』が東洋文庫から既に出ている。

通訳の日本人を一人伴ったとはいえ、開国間もない日本を女性が一人で護衛も付けずに旅行できたことに先ず驚嘆するが、子細に記述を読んでいくと、日本という国の内情を知るための実地調査の赴きを呈している。食物、食事の作法、女性の教育、女性の化粧の仕方、樹木の名称、養蚕の説明、等々、後にお雇い外国人で同じ英国人のバジル・ホール・チェンバレンが日本語に熟達し、『日本事物誌』という百科事典を編纂するが、日本語を習得せずそれを旅行記で成し遂げた観がある。

ただこれを徒手空拳で完成させたとは到底思えず、そこには既に日本に関する知識の集積や地図があり、交通網がある程度整備されていることが分かる。無制限の旅行免状の取得には当時の駐日英国公使のハリー・パークスが関与し、単なる個人旅行ではなかったことが窺われる。日本は植民地ではなかった

が、大英帝国はその情報収集に努めたのである。明治7年の酒の醸造高が3,747,666石で、一人当たりの消費量が11.4升で、酒税が1,802,324円だと普通の旅行者は知り得ない。

また、その目的の一つはキリスト教布教のためであったことは想像に難くない。既に宣教師が日本各地にいて、医師や教師も宣教活動の一翼を担っていた。19世紀までの西欧文明の達成を考えれば、西洋人の優越感の宜なるかなと、21世紀から振り返ることも可能である。

目的はともかく、バードは奥日光や赤湯温泉や上山温泉で「温泉場で見ることのできる日本人の風習や娯楽、そしてヨーロッパのものを何ら取り入れていない完璧なる独自の文明には興味をそそられる」と、まるで『テルマエ・ロマエ』のローマの浴場設計技師ルシウス・モデストゥスのように書いた。また、赤湯のある米沢平野をエデンの園と誉めた。本書で全体に感じられる筆致は辛辣であることは不思議ではないが、風景の見事さや子供への愛情や日本人の親切には素直に賞賛を惜しまない。

今回紹介する東洋文庫の訳書の特徴は、本文に匹敵する量の訳注が付いていることである。博引旁証という言葉があるが、本書は該博な知識をひけらかすのではなく、バードが探訪した人物と場所と日時を一つ一つ考証・確定していくという気の遠くなるような作業を通じて出来上がった訳文になっている。本文と並行して訳注を読み進めていくと、英米人が普通に原著を読んで得られる知識の数倍のものを与えてくれるような印象を受ける。真理は細部に宿ることを教えてくれるこの労作と訳者に感謝したい。（浜田 眞之）

## 温泉地情報

### 峰温泉にみる温泉の有効活用

澤田陽介 (温泉ライター)

#### 1 峰温泉

峰(みね)温泉は、静岡県賀茂郡河津町に位置する温泉地である。近隣には、熱川、稲取、湯ヶ野など、人気の高い温泉が多い。旅館群で賑わう熱川温泉等に比べて、峰温泉では8軒余りの宿屋が建つのみだ。そのため静けさが大いに溢れ、落ち着く顔を持つに至った。ナトリウム-塩化物泉の源泉は、無色透明でわずかに塩気を帯びた、弱アルカリ性の特徴を持つ。8軒余りの宿泊施設は、由緒正しい和風宿から、クアハウスの要因を採り入れる宿、さらにペンションなど、多様性も見せている。

河津町の観光協会によると、峰温泉の開湯は、宝亀10(779)年に遡るとされている。菖蒲やカキツバタの花が、昔は豊富に咲いていたため、「花田の湯」として親しまれていた。その後、次第に荒廃の道をたどってゆくが、地元の旅館玉峰館における初代主人、稲葉時太郎により、「花といで湯の郷」なる再興計画が図られた。

稲葉は大正13(1924)年より自ら新源泉を掘削し始め、同15(1926)年、火山噴火を思わす轟音が、突如響いて天を差した。それと同時に湯けむりと、50メートルの高さまで湯が噴出し、90年近く経つ今も、湯量は変わらず毎分600リットルにのぼる。そのまま噴出し放題にしておくと、近隣住人に影響が出るため、近年では管理のもとに置かれている。現在は、管理人が1時間ごとにバルブを開き、大噴湯の迫力を楽しむことができる。もちろん、噴き出す時間外でも、湯けむりは常に上がっている。

#### 2 温泉の有効利用

峰温泉における温泉利用は、観光地としての理想に近い。大噴湯を中心に、無駄のない充実ぶりを見せているためだ。

大噴湯は、温泉やぐらを前面に、峰温泉大噴湯公園内で湧いている。公園内にはその他に、大噴湯たまごの製造空間や、大きな足湯が設えられている。加えて珍しいものが二つある。一つは、売店で購入したお汁粉やおでんなどを、高温源泉により温め直す保温卓。二つ目は、石造りの腰掛けにステンレスの板を張り、内部に温泉を通したホットベンチと称されるものだ。保温卓とホットベンチは、それぞれ個別に独立し、大噴湯を囲む形で位置づけられている。そのため、大噴湯のバルブが開く時間を待ちながら、温泉由来の暖かさに触れることが可能となるわけである。

また、大噴湯公園から数歩の場所には、源泉を引く旅館が建ち、日帰り入浴施設、踊り子温泉会館も備わっている。踊り子温泉会館は、河津町が『伊豆の踊子』(川端康成、1927)の舞台となったため、その名を取ったものらしい。ここでは露天風呂も用意され、春先には河津桜を前にした花見風呂も楽しめる。大噴湯を軸として、ホットベンチに保温卓、旅館や日帰り入浴施設など、一つの源泉がこれほど有効活用される地は極めて貴重な存在といえる。

#### 3 課題

大噴湯の公園内には、特産品の販売所があり、踊り子温泉会館では、そば処も隣接している。近くにそびえる樹齢800年以上の天然記念物、「大ソテツ」は人気であるし、河津桜の並木が茂る、遊歩道も見逃せない。

このように、宿泊をして源泉に触れ、日帰り入浴に食事に散策と、峰温泉では様々な楽しみが一体化されている。仮にクアハウス形態の宿へ宿泊すれば、半径一キロ圏内でのク

アパーク的利用も期待が持てる。湯客をさらに魅せるには、その種の複合性を一層強く、アピールすると良さそうだ。



写真 峰温泉の大噴湯(左)、ホットベンチ(右)  
(注) 筆者撮影。



図 峰温泉見取り図  
(注) 筆者作成。

## 学会記事

### ●日本温泉地域学会第24回研究発表大会

2014(平成26)年11月9日(日)・10日(月)の両日、日本温泉地域学会第24回研究発表大会を山形県大蔵村肘折(ひじおり)温泉にて開催いたします。肘折温泉は隣接する黄金、石抱温泉と肘折温泉郷を形成し、含重曹—食塩泉と炭酸泉を併せ持つ、山形県有数の伝統的な湯治場景観を保つ温泉場として知られています。今回も多くの会員の参加を期待します。

### 日本温泉地域学会第24回研究発表大会スケジュール

開催温泉地：山形県大蔵村肘折温泉

開催日：2014(平成26)年11月9日(日)～10日(月)

発表会場：肘折いでゆ館 TEL.0223-34-6106

宿泊施設：つたや肘折ホテル他、分宿

懇親会場：つたや肘折ホテル TEL.0223-76-2321

視察会集合：11月9日(日) 第一集合場所：山形新幹線さくらんぼ東根駅前(13時10分)。東京方面からの13時03分着新幹線を待ってバスで出発、第二集合場所の山形空港へ。九州方面から乗り継ぎ可能な伊丹空港12時30分発、13時45分着JAL便を待って出発(13時50分頃)。

交通案内：現地手配による帰りのバスは、山形新幹線新庄駅と山形空港行きの二便。新庄駅へは、シンポ終了後、昼食を済ませてから10日午後2時過ぎ出発。新庄駅発15時17分の新幹線に間に合います。山形空港行きは17時55分発、伊丹空港着19時15分のJAL便(九州方面乗り継ぎ可)に間に合うように現地出発。

受付：11月9日(日) 17:00～つたや肘折ホテル  
11月10日(月) 8:30～肘折いでゆ館

参加費：一般会員・賛助会員2,000円、学生会員1,000円

懇親会費：5,000円(学生3,000円)。学会指定ホテルを利用する場合、懇親会費は宿泊費に含まれます。

宿泊費：学会指定宿泊施設(分宿)を利用する場合、懇親会費・朝食込みの1部屋2名利用基本で1人当たり料金1万2,000円です。なお、一人室希望は別途相談。

昼食：今回は大会終了後に昼食(自由)となります。会場にも食堂があります。

参加申込：参加者は下記参加形態によって該当金額を郵便振替で学会事務局宛に10月24日(必着)までに送金してください。

研究発表大会に参加される会員は、以下の参加形態によって郵便振替で学会事務局宛に相当金額を10月24日必着で前納してください。振込によって学会参加申し込みとします。

また、本年度年会費(賛助会員：3万円、一般会員：4,000円、学生会員2,000円)未納の方は、以下の金額に年会費をプラスして送金してください。研究発表大会不参加の場合でも、会費未納の会員は郵便振替用紙で送金をお願いいたします。

学会指定ホテル泊+学会参加：12,000+2,000=14,000円(学生：13,000円)

懇親会参加+学会参加：5,000+2,000=7,000円(学生：6,000円)

視察会・学会参加のみ：2,000円(学生：1,000円)

郵便振替口座番号：00190-6-462149

加入者名：日本温泉地域学会

## 日程

### 11月9日(日) 視察会、懇親会

13:10 山形新幹線さくらんぼ東根駅前集合。山形空港13時50分頃集合

13:10～16:50 視察会：さくらんぼ東根駅～山形空港～肘折温泉郷(カルデラ跡～炭酸泉の黄金温泉カルデラ温泉館入浴・飲泉～肘折温泉街散策)。希望者には紅葉の地蔵倉散策後にカルデラ温泉館合流コースも用意します。

17:00 つたや肘折ホテルで宿泊・懇親会の受付。分宿

18:00 懇親会(つたや肘折ホテル)。懇親会のみ参加：5,000円(学生3,000円)

### 11月10日(月) 研究発表大会(会場：肘折いでゆ館)

早朝6時から温泉街で名物・朝市が催されます

8:30 受付

9:00～10:00 研究発表

10:00～10:10 休憩

10:10～11:10 研究発表

11:10～11:20 休憩

11:20～11:50 基調講演

11:50～12:00 休憩

12:00～13:30 シンポジウム

13:30～ 昼食(自由)・現地解散

14:00頃 新庄駅までの送迎バス出発。山形空港行きは後発16時頃出発

## 研究発表大会プログラム

### 11月10日(月)

**自由論題** 発表時間：20分(発表15分、質疑5分)

座長：徳永昭行(長野市開発公社)

9:00～9:20 浅利浩之(フィルムセンター)：「1930年代の温泉を映画で観る」

9:20～9:40 古田靖志(下呂発温泉博物館)：「温泉によって生成される石灰華の形態的分類と温泉地域資産の評価」

9:40～10:00 井上晶子(立教大学観光研究所)：「温泉地における滞在に関する研究(1) —『滞在』についての一考察—」

10:00～10:10 休憩

座長：古田靖志(下呂発温泉博物館)

10:10～10:30 内田彩(大阪観光大学)：「温泉地における滞在に関する研究(2) —宿泊施設による魅力ある滞在にむけての試み—」

10:30～10:50 鈴木晶(別府大学)：「中国古都洛陽における温泉観光開発」

10:50～11:10 前田勇(立教大学)：「観光研究におけるコーホート分析 —関係出来事的生活史を通して—」

11:10～11:20 休憩

### 基調講演

11:20～11:50 金坂清則(京都大学名誉教授)：「イザベラ・バードが旅して見た東北日本、山形、温泉地」

11:50～12:00 休憩

### シンポジウム

12:00～13:30 シンポジウム：「湯治場の再生—現代の湯治場の意義を考える」

コーディネーター：石川理夫(温泉評論家)

パネリスト：吉野妙子(山形県温泉協会専務理事)

：木村裕吉(大蔵村観光協会会長)

：山村順次(千葉大学名誉教授)

- 日本温泉地域学会第23回研究発表大会は、2014(平成26)年5月25日(日)・26日(月)の両日、鳥取県米子市皆生温泉にて開催され、芙蓉別館を会場に70名近い会員が参加し、視察会、懇親会、研究発表ならびにシンポジウムを無事終了することが出来ました。

視察会では米子駅前を出発、霊峰大山を車窓から仰ぎ見ながら高速道路で岡山県を經由して鳥取県の古湯、関金温泉まで足を延ばし、関金温泉プラチナ(白金)プロジェクトを担う倉吉市役所観光交流課職員・地域おこし協力隊、地元サポートのもと、足湯や「白金の湯」と称えられた源泉入浴、希望者は湯中運動も体験できました。このたびの皆生大会開催にあたっては倉吉市や皆生温泉の会員の尽力のもと、米子市長のごあいさつと懇親会参加もいただき、かつ視察会にはとっとりコンベンションビューローから大型バス2台の提供をいただきました。あらためて感謝いたします。

- 第11回草津温泉観光士養成講座が草津町との共催で、平成26年9月24日(水)～26日(金)の2日半にわたり、開催されます。合格者には「温泉観光士」の証書が授与されます。
- 学会誌『温泉地域研究』第24号(2015〔平成27〕年3月刊)の論文・研究ノート・書評・資料・温泉地情報などの原稿を募集します。投稿規程・執筆要領(学会ホームページに掲載)に従い、これまでの学会誌を参考にして、直接編集委員会(編集担当メールアドレス mi-ishikawa@ac.auone-net.jp)宛に原稿送付状とともにワード原稿(テキストならびに図版)を送付してください。原稿は常時受付けていますが、第24号への原稿送付締切りは2015(平成27)年1月20日(火)必着です。

論文と研究ノートは、査読を受けてパスしたものから順次、学会誌に掲載します。当学会では、会員による温泉地と温泉にかかわるさまざまな切り口・問題意識からの新しい研究発表と投稿を歓迎しています。原稿作成に関して、詳しいことは編集委員会や常務理事、理事に相談して下さい。

- 来春の第25回研究発表大会・総会の開催日程・温泉地が決まりました。2015(平成27)年5月17日(日)・18日(月)の2日間、長崎県雲仙市雲仙温泉にて開催します。長崎は新しく本学会事務局(長崎国際大学人間社会学部池永研究室内)を置いた県でもあります。詳細は今後、学会HPならびに次号来春3月刊『温泉地域研究』に掲載します。
- 研究発表を希望される会員は、2015(平成27)年2月25日(水)必着で、発表者名・所属・タイトル・発表内容(100字程度)をメールまたははがきを書いて学会事務局へ申し込んでください。
- 学会HPでは学会ニュースをたえず最新のものに更新しています。会員はふだんから学会HPを閲覧するように要請します。

# 日本温泉地域学会入会申込書

平成 年 月 日

会員種別	一般	学生	賛助 ( ) 口
ふりがな 氏 名	印 (満 歳) 男・女		
団体名・商号 代表者名	印		
勤務・所属先名称			
所在地	〒		
	電話	( )	
	FAX	( )	
E-mail :			
現住所	〒		
	電話	( )	
	FAX	( )	
E-mail :			
研究・関心分野			
メールでの対応	可能	不可能	
研究会誌送付先	勤務・所属先	現住所	

\* 学生会員は学生証の写しを同封してください。

事務局受付日： 年 月 日

申込書送付先

〒 859-3298 長崎県佐世保市ハウステンボス町 2825-7

長崎国際大学人間社会学部池永研究室内

日本温泉地域学会事務局

(mikenaga@niu.ac.jp)

電話：0956 (20) 5526

FAX：0956 (39) 4908

郵便振替：口座番号 00190-6-462149 加入者名：日本温泉地域学会

# Journal of Studies on Spa Region

No.23  
2014.9

## contents

### Articles

- Consideration about Formation of Hot Spring Places and its Communal Baths  
in Tottori Prefecture  
..... Michio ISHIKAWA (1)
- An Analysis of Postwar Development of Tourism in Hot Spring Areas Based  
on Newspaper Coverage  
..... Aya UCHIDA (13)
- Methods and Meaning of Bathing Assistance for Persons with Disabilities  
~ The Trial of “NPO corporation YUPIA”  
..... Hitoshi YAMADA (25)
- The Present Conditions and Problems of Hot Spring Facilities in Aomori Prefecture  
through the Fact-finding of Suspended or Closed Business  
..... Kiyokazu TANIGUCHI (35)

### Research Notes

- Tourism Development of Taian Spa at Miaoli prefecture, Taiwan  
..... Tatsuo URA Takaaki KOBORI Herman HSU (47)
- Consideration about Utilization for Hot Spring Resort and Health Care  
at Sekigane Spa in Tottori Prefecture  
..... Takachika KITOU (55)

### Symposium

- Development of Hot Spring Areas in Tottri Prefecture – A Prospect of Tourism Promotion  
..... (61)

### Book Review

- “OMOTENASHI Saves People’s Lives” Editorial Committee 『The Document of Great East  
Japan Earthquake (3.11) by All Japan Ryokan Hotel Association – OMOTENASHI Saves  
People’s Lives – The Role and Challenge of Ryokans and Hotels』  
..... Shinichiro OKAMURA (73)
- Nobuyuki Sasaki 『Science of Hot Springs – Fundamental Knowledge for  
the Enjoyment in Hot Springs – 』  
..... Hideyuki NAGASHIMA (74)
- Isabella Bird; translated by Kiyonori Kanasaka 『Complete Editon of Unbeaten Tracks in Japan』  
..... Masayuki HAMADA (75)

### News on Spa

- Effective and Practical Use of Hot Spring Resources at Mine Onsen  
..... Yosuke SAWADA (76)

- Notes and News ..... (78)